

月刊 FALCOM MAGAZINE

Vol. 180

ザナドゥの
一番"カワイイ"を探そう！
み～んな集まれ！ ファルコム学園

英雄伝説 空の軌跡
&
啄木鳥しんきのFalcom日和

『空の軌跡 the 1st オリジナルサウンドトラック』
レビュー

ファルコムニュース

英雄伝説 零の軌跡 午後の紅茶にお砂糖を

FALCOM MAGAZINE

CONTENTS

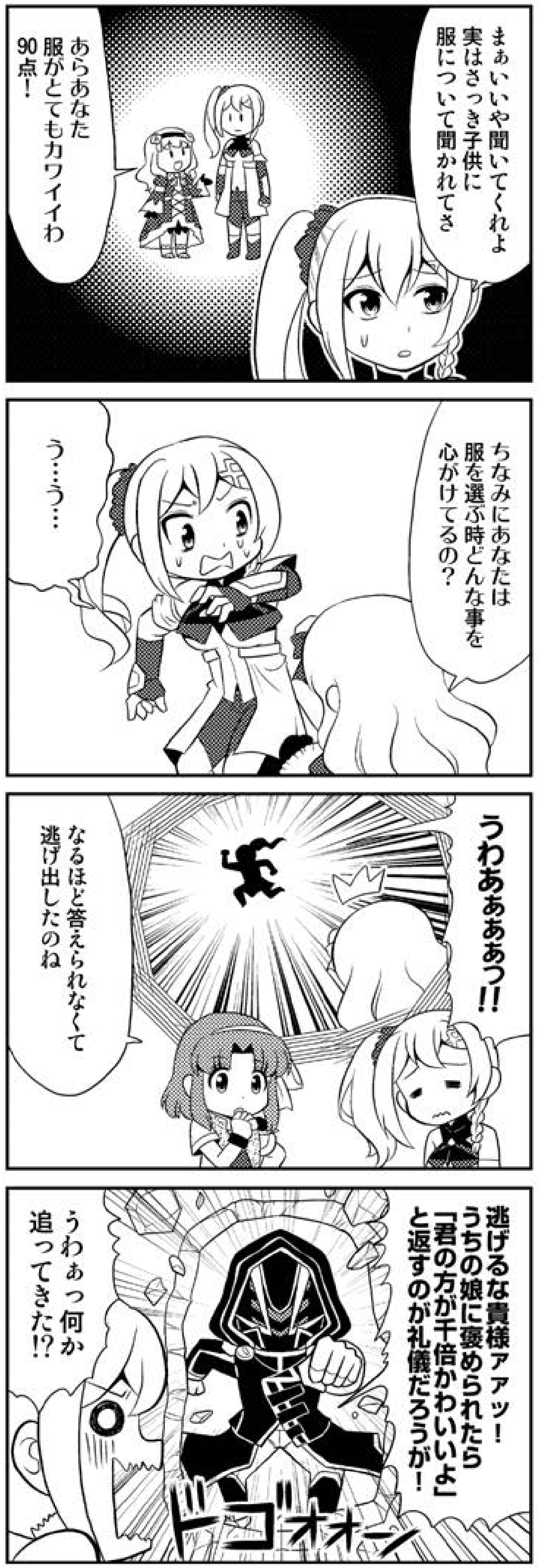
★正直「かわいい」って難しいですよね★



カワイイ自己紹介



逃げる者と追う者



アネラス先生のカワイイ教室



あの時の気持ち



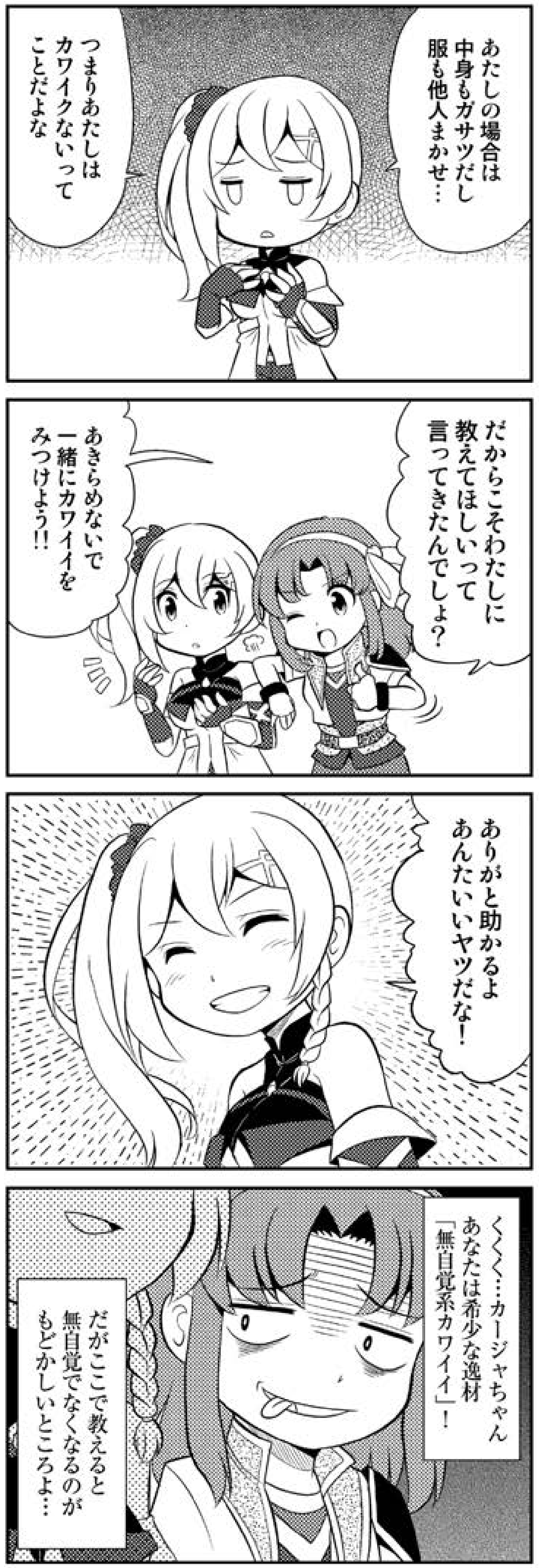
上級者登場



逆鱗に触れる



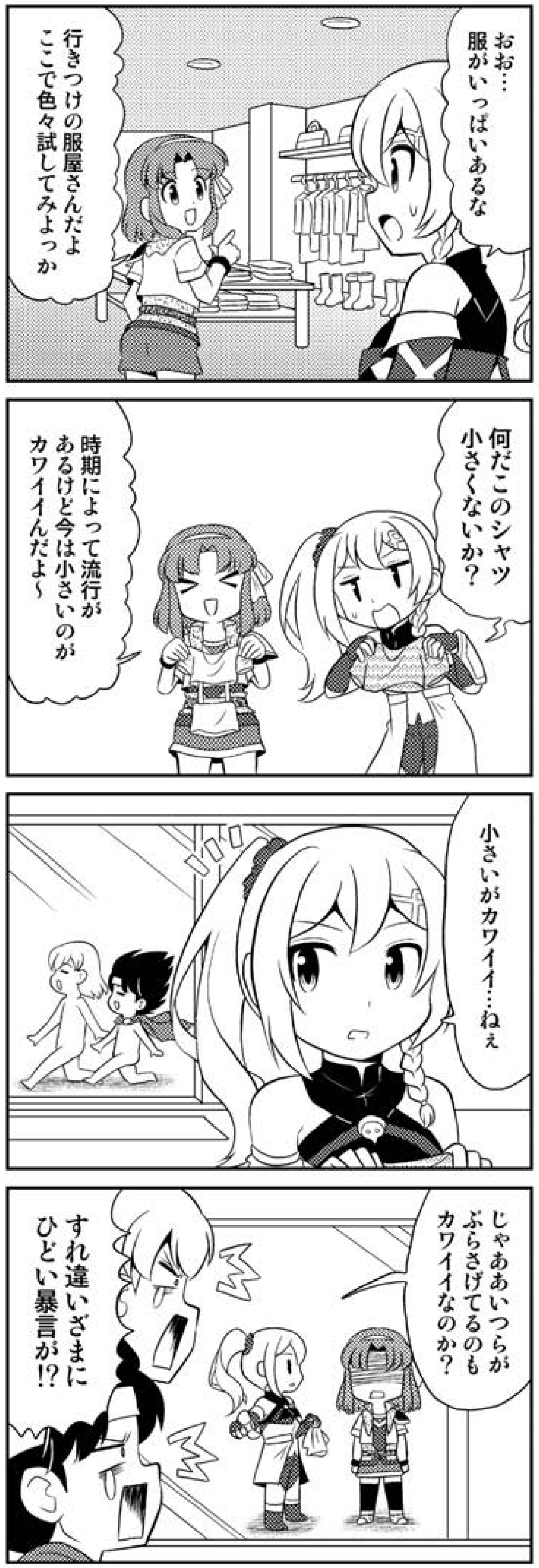
カージャの本質



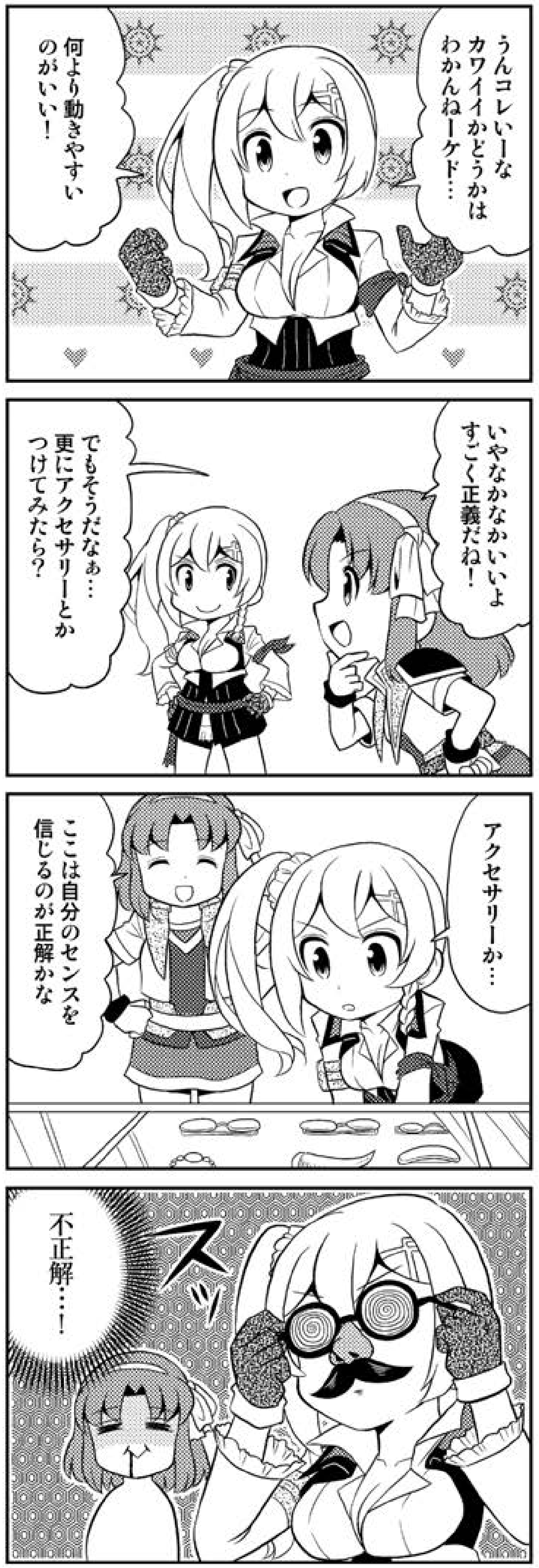
みんなのカワイイ



小さいは正義



アクセサリー



意識する視線



手慣れた切り返し



真剣な圧



100点満点のカワイイ





英雄伝説 閃の軌跡06

原作／日本ファルコム
脚本／恵村まお　漫画／さがら梨々
A5判　160P　定価：本体991円＋税

ISBN 978-4-8021-3123-0

エレボニア帝国に吹き荒れる陰謀の嵐！
時代が選ぶのは果たして誰か!?
そして友という絆に背を向け、
両雄相まみえる！

好評発売中!!

激動のクライマックス！

発行：フィールドワイ　フィールドワイ公式HPはこちら→www.field-y.co.jp
発売：メディアパル　ファルコムブックス公式HPはこちら→www.field-y.co.jp/falcombooks

日本ファルコム創業40周年を余裕で超えても、尽きることなく怒涛の勢いでニューカマーが押し寄せるファルコム学園！いつまで続くのかこの進撃！ そして天才・新久保だいすけに果たして限界はあるのか!? 様々な難問に挑戦し続けるご存知"ファル学"第4巻！

実は、計10冊目の『ファルコム学園』！



も〜っと集まれ！ ファルコム学園④

新久保だいすけ
定価：本体 909 円＋税

ISBN 978-4-8021-3387-6

発行:フィールドワイ　フィールドワイ公式HPはこちら → www.field-y.co.jp
発売:メディアパル　ファルコムブックス公式HPはこちら → www.field-y.co.jp/falcombooks

▶ファルコムニュース◀

ファルコムファンに贈る最新ニュースをピックアップ！

【ファルコムショップ】新作ポイント交換グッズ！

ファルコムショップの会員限定サービス『ポイントプログラム』に新作グッズがラインナップ。『空の軌跡 the 1st』のちびアイコンイラストを使用したマグネットは、ここだけのポイント品専用にオリジナル製作。
お買い物でポイントを貯めちゃおう！



ポイントプログラムとは…

ファルコムショップでは会員にご登録いただくと、商品のご注文時にポイントが付与されます。
貯まったポイントは申し込みページよりお申込みいただくことで、ポイント交換グッズと交換することができます。





ファルコムショップ
https://falcom.shop/

〈Falcom jdk BAND LIVE 2026〉フリー入場物販も開催!



2026年2月7日（土）に、東京フルライブの物販リストを公開。先行販売の45周年記念アルバムやライブグッズ新商品の数々が登場します。
ライブ開場前の1時間半はフリー入場の物販もOPEN。ライブチケットをお持ちでない方もご利用いただけます。

※これまで通り、開場後～ライブ終演後も物販を行います。物販商品などの詳細はライブ特設サイトをご確認ください。

■**日時**：2026年2月7日（土） 開場16:30／開演17:30
※開場前のフリー入場物販 14:00～15:30
■**会場**：赤羽ReNY alpha



特設サイト
https://www.falcom.co.jp/jdk/2026/

リボルテック「アドル・クリスティン」予約受付中!

海洋堂より、ファルコムキャラクターがアクションフィギュアのREVOLTECH（リボルテック）シリーズで発売決定。アドル・クリスティン「イース I&II クロニクルズ」Ver. ご予約受付中。







★海洋堂直営店（海洋堂オンラインストア、ホビーロビー東京）でご予約いただくと、新規造形の顔パーツを追加。茶目っ気のある「ウィンク顔」で、日常の姿を表現することができます。

■**予約受付期間**：2026年7月31日 15:00まで
■**発売日**：2026年8月予定
■**価格**：9,900円（税込）

海洋堂オンラインストア	ホビーロビー東京
https://www.kyd-store.jp/c/genre/revo/nr111	https://kaiyodo.co.jp/kaiyodo_HB/TK_topics/

フィギュア「アニエス」1/8スケール予約受付中！

コトブキヤ × 日本ファルコムが贈る『軌跡シリーズ』フィギュア化計画。「アニエス・クローデル」の1/8スケールフィギュアの予約受付中。
『英雄伝説 黎の軌跡』に登場した私服姿で立体化。艶やかな金髪の美しい髪の流れ、柔らかさを感じる体躯、導力杖（オーバルスタッフ）の細かなディテールなど、見どころ満載です。







■**メーカー受注締切**：2026年2月24日（火）
※以降は上限に達し次第受付終了
■**発売日**：2026年7月予定
■**価格**：24,200円（税込）

コトブキヤオンラインショップ	https://shop.kotobukiya.co.jp/shop/g/g4934054074990/



史上最高の入門編。原典を尊びつつアップデートを行った繊細な再定義作。

「軌跡シリーズ」が生誕20周年を迎え、『英雄伝説 空の軌跡 FC』が『空の軌跡 the 1st』となってフルリメイク。4K映像で生まれ変わった4K音楽をハイライトしてみる。

text by 井上尚昭(ゲーム音楽ディスクガイド)

原典となる『英雄伝説 空の軌跡 オリジナルサウンドトラック』(2004)については、『月刊ファルコムマガジンVol.164』にて取り扱い済みにつき、基本的な音楽性などはそちらをご覧いただくとして……繰り返しになるが歴史を駆け足で履修しておきたい。

『英雄伝説 空の軌跡 FC』のオリジナル版は2004年にウィンドウズで発売された。他機種への移植に合わせて戦闘シーンのみなど段階的に実装、PlayStation Vita『英雄伝説 空の軌跡 Evolution』(2015)シリーズでフルボイス化を果たす。この時、HD画質に対応するための描き直しや、楽曲の全曲リアレンジなどかなり手が入れられた。今回の『the 1st』は3D化と4K描画(Nintendo Switchは2のみ対応)、プレイアビリティの改善、そして更なる楽曲のリアレンジを行った究極版となる。

新旧楽曲を比較してみると、大きく変更があったものと驚くほど変わっていない(勿論意図して変えていない)ものとに大別される。オープニングのように、映像尺からして異なるものは必然的に音も変更を余儀なくされるわけであるから不思議なことはない。また「リメイク作ゆえ変わっていない」というのもある観点では正解であり、後ろ向きな要素とも言えない。

しかしこの「変わっていない(ように聞こえる)」というのが相当に難しい。オリジナル版からしてチップチューンではなく打ち込みや楽器演奏によって制作された音楽であったので、リメイクといえどそのまま使いまわせば思い出は再現される。果たしてそれでいいのだろうか。制作スタッフの自己疑問があったと想像する。

具体的に見ていこう。M-2「星の在り処 Harmonica short Ver.」は主人公が吹くハーモニカ曲だが、これが大変貌を遂げてしまってはさすがに戸惑ってしまう。ビブラートをかけるなど奏法の表現力を上げた程度に留めてある。M-3「旅立ちの小径」は街などで聞かれる穏やかなアコースティック曲だが、アレンジ面に変更はないもののオカリナ、マリンバ、アコーディオンといった楽器群は温もりを感じる演奏になった。これらは再現パターンと呼んでみることにしよう。

次のM-4「地方都市ロレント」もアコギ、ピアノ、シンセリコーダーによる優雅な小編成もので、音も再現パターンと同一方向に処理してあり、作品全般全体的に柔らかなマスタリングが目指されていることが分かる。上記属のようであるが、グロッケンが密かに追加されていて煌びやかさが加わって不意を突かれる。同様にM-21「ピンチ!!」でもビブラフォンが足されて夜ジャズ感を得ており、こちらは楽器追加パターンと括ってみたい。ひと味足した意味はなんであったか。映像と睨めっこしながら考えてみるのも面白い。

M-7「Sophisticated Fight-Command Battle-」はドラム抜きバージョンとフルミックスの2種用意され、雰囲気がガラッと変わった。シンセコーラスが足されて、メロ主体からドラムとベースのリズムで引っ張る方針にモデルチェンジ。M-12「Secret Green Passage」やM-20「To be Suggestive」、CD2-M2「闇を彷徨う」なども同じケースで、豊かな低音部を味わえるジャズ寄り改変パターンと言える。ここは、サウンドスタッフの趣味がかなり出た一群と見ているがいかがだろうか。若手の現代ロックジャズ的なアプローチを思わせる。

M-9「四輪の塔」はテンポが若干遅くなっている。順序前後するが、M-5「Rock on the road」はテンポが早くなっていたので、コンテンツ倍速視聴者を抱えるZ世代の登場などもあって全体的にテンポアップ設計なのかと思っていたが、そうではないことがココで分かる。次曲M-10「月明かりの下で」やM-17「琥珀の愛 Lute ver.」なども同様に少しスローになっており、これらはテンポ改変群となる。斜め読み可能なテキスト会話と違い、フルボイス演出に寄り添うと少し遅い方がよいという判断だと見た。

M-13「胸の中に」は哀愁オルゴール曲で、手動ボックス製品をそのまま録音したような作りだったものを、ベルシンセに変更し劇伴的な存在へ。ゲーム内舞台劇で使用される「組曲」の一連も、手回しオルガンだったものを弦楽化した似た例ではあるが、こちらは『空の軌跡 FC Evolution』準拠。楽曲ごとに最適な方法を過去作から選択していることになる。トロピカルな雰囲気はそのままに、オカリナからバイオリンにメロ楽器を変更したM-15「商業都市ボース」も『Evolution』準拠だ。

個人的なお気に入りがCD2-M5「暗がりがくれた安らぎ」だった。ミックスバランスが変わってキラキラ音色を裏側へ。パッド系のシンセが被せられて追憶感が増し、80年代映画でよく見られたノスタルジー劇伴のような仕上がりになっている。

そして最後にCD2-M21「告白」に触れて本稿はおしまいとなるが、こちらはクライマックスの一幕を担う演出の関係上、随分様変わりし終章に相応しい大曲に成長した。今となってはオリジナルのピアノバージョンは今作のプレリュードに思えるほどだ。

全体の音像もかなり変わった。オリジナルでは定位を左右に振ってアコースティックライブ感のある音作りも見られたが、ボトムをセンター寄りにして安定化。拡がり感やヌケの改善によって立体的に聞こえるよう工夫してある。こうして眺めてみると、ローンチ前に執筆した『月刊ファルコムマガジンVol.164』において、あれこれ『the 1st』の音楽性について想像を張り巡らせてみたものは、まったくのお門違いであった。原作と違う……という印象を抱かせないよう、「変更あるも空気は体現する」この匙加減をサウンドチームは全楽器に渡って注意深く行っていたのだ。ゆえに人によっては変化に気づかない場合もあるだろうが、それはそれで正しい受け止め方と言える。こうして新たな軌跡コレクションがまたひとつ加わった。



■商品情報
空の軌跡 the 1st オリジナルサウンドトラック
●好評発売中
●価格
【CD盤】3,080円
【DL版】[アルバム] 2,750円 [単曲] 154円
【ハイレゾ音源版】[アルバム] 2,750円
[単曲] 154円
※価格はすべて税込です
※ダウンロード版は配信サイトによって価格が異なる場合があります


英雄伝説
空の軌跡
ソラノキセキ
漫画 啄木鳥しんき
原作 日本ファルコム
あたしたちは黒装束たちに構ってる暇なんかないんだからっ！
エステル！ 伏せてっ!!
ゴオオオオ
きゃーーっ!!


“輝く環”を目指す一行の前に結社《身喰らう蛇》の執行者たちが次々と現れる。
エステルとヨシュア、アガットの前に立ちはだかる《剣帝》レオンハルト。
かつて兄と弟のように育ったレーヴェとヨシュアが、万感の思いを込め剣を交える！
空の軌跡、ここに完結！
英雄伝説 空の軌跡SC
～絆の在り処～⑦
啄木鳥しんき
定価：1,210円（本体1,100円+税） ISBN 978-4-8021-3516-0
発行：フィールドワイ 発売：メディアパル
©Nihon Falcom Corp. All rights reserved.
©Kitsutsuki Shinki
©FIELD-Y
www.field-y.co.jp


ドオオン
ゴゴゴ
ゴゴ…ゴ


な…なんなの!? あの飛行艇!?
墜落さながら突っ込んでくるなんて…
まさかあたしたちを狙って…
エステル!! ケガはないね!?
ひゃい
特務兵が降りてくる!!
飛行艇から離れよう!!
あ…
うんっ!!
も──おっ!!
もっとしっかり操縦してよーっ!!
仕方ないだろ! 山猫号とは違うんだから!
言いわけは見苦しいぞ
とにかく再チャレンジだ!
じゃあボクは外側に故障がないか見てくるね!
た!

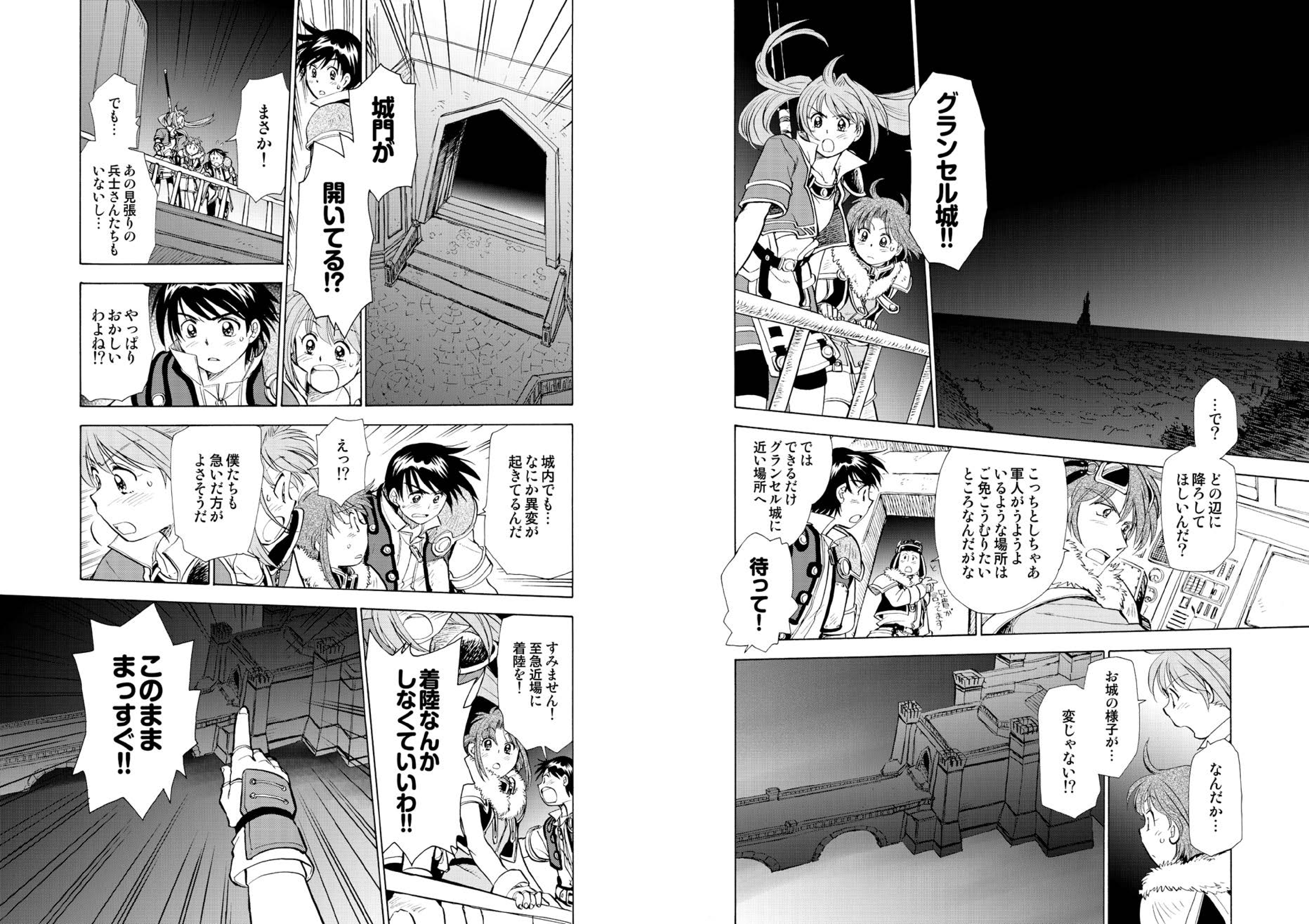

頑張ってよ キール兄っ!
こんなところで ぐずぐずしてたら
また
めんどーな奴らに 捕まっちゃ…
ああーー!!
うそ…っ あんた…っ
どうして ここに…!?
それは こっちの セリフよ!!
どうして ジョゼットが その飛行艇に 乗ってるの!?


やっぱり あんたたち…
カプア一家も 情報部の仲間 だったのね!?
ばっ…
冗談じゃ ないよっ!!
あんな奴らと 一緒にするなっ!!
あいつらはね!! ボクたちをはめた 張本人なんだよ!?
仲間のフリして 近づいてきてさ!!
そ…そりゃ… 騙されたボクたちも 悪いんだけど…
とにかく!! ボクはあいつらが 大っっ嫌いなんだっ!!
ふんっ
…ボクたち ちょっとヤボ用で 要塞から王都へ連れて こられてたんだよね
だったらなんで 情報部の船なんかに…
そしたら さっき…
そ、そーですか
情報部の間で なにか トラブルが起きた らしくてさ…
パタパタ してたから…
飛行艇 奪って 逃げ出して やったのさ♡
えっへん
あ〜あ
おーい ジョゼットー


飛べそうだから
中に戻れってさ
ほ…
べーっ
そんなわけだから
おまえなんかと
やりあってる
暇はないのー
見逃してやるから
とっとと
行っちゃいな!
はーい!
エステル!!
うんっ!!
ジョゼット!!
がしっ!!
あたしたちを
この船に
乗せて!!
はあ!?
女王様が…
情報部の人質に
なってるの!!
このままじゃ
女王様の命が
危ないのよっ!!
今すぐ助けに
行かなきゃ
いけないの!!
走ってたら…
もう間に合わない
かもしれない…
お願いっ!!
あたしたちを
お城まで
連れてって!!
あ…
う…
何やってるんだ
ジョゼット!!
ド…
ドルン兄…
おまえらも!!
人の命が
かかってんのに
のんびりしてる
場合かよ!?
んなところで
騒いでないで
さっさと乗れ!!
で…でも
ドルン兄
ボクたちは
一応空賊だし…
ジョゼット!
厚かましい
頼みなのは
重々承知してる
けど…
僕たちに
君の力を貸して
ほしいんだ!


グランセル城へ!?
アニキもねっ
まったく…
お人好しな
兄妹だな…
本当に
ありがとう!
ジョゼット!!
るっさいなぁ!
脳天気女!
別におまえの為に
動いてやったんじゃ
ないんだからぁ!
…あいかわらず
素直じゃないわね
このボクっ子は
ボクっ子
言うなっ!!
あの…
ドルンさん…
ん?
なぜ…
僕たちに
協力を?
はっはっは
まあ…
リベールの女王には
色々迷惑をかけた
らしいからな
これで全部
チャラって
ことに…
…は
さすがに
ならないか!


迷惑をかけた
らしい…とは
どういう
意味ですか?
自分でも…
不思議なんだがな
俺が
起こしたっていう
飛行船襲撃事件
いや……
なんとなく……
あの飛行船を
襲わなきゃ
ならねえような
気持ちと
襲撃のやり方は
なぜか頭に残って
いるんだが…
俺はそいつを
きれいさっぱり
忘れちまってる
みたいなんだ
その情報を
いつどこで
知ったのか
それを
実行した
のか…
情けねえことに
何ひとつ覚えちゃ
いねえんだよ
それは…
ヨシュア!!
見えたわ!!


グランセル城!!
…で？
どの辺に降ろしてほしいんだ？
こっちとしちゃあ軍人がうようよいるような場所はご免こうむりたいところなんだがな
兄貴が言ってます
ではできるだけグランセル城に近い場所へ
待って！
なんだか…
お城の様子が…
変じゃない!?
城門が開いてる!?
まさか！
でも…あの見張りの兵士さんたちもいないし…
やっぱりおかしいわよね!?
城内でも…なにか異変が起きてるんだ
えっ!?
僕たちも急いだ方がよさそうだ
すみません！至急近場に着陸を！
着陸なんかしなくていいわ!!
このまままっすぐ!!


お城の中庭をすり抜けて!!
そんな…
危ないよ!!
大丈夫よ
ありがと!
ご協力
感謝
します!
あ…
ヨ…
……
またっ!!
困ったことが
あったら
いつでも
言いなよね!?
うん
ボクたち
カプア一家が
力になって
やらないことも
ないからさ!
その時は頼りに
させてもらうよ
行くぞ!!

ガシッ
今だ!!
たたっ
おぉー
やったー
スタッ


女王宮へ!!
急がなきゃ!!
いました!!
こっちにも侵入者です!!
あなたたちまで…!!


カノーネ大尉!!
エステル!!
ここは僕に任せて!!
ヨシュア!!
見て!
女王宮には特務兵がいない!
入口の見張りさえ置けないくらいに
情報部にとって良くないことがグランセル城の中で起こってるんだ!
これはチャンスだよエステル!!
君は先に行って陛下のおそばにいてあげて
ここを片づけたら僕もすぐに行くから!


絶対無理しちゃダメだからね!!
了解!
女王様!!
助けに来ま…


……
…女王様!?
どこ!?
女王様っ!!
エステルさん?
よかったぁ…
テラスがあるなんて知らなかったから…
いけません!
お逃げなさい!! エステルさん!!


ロ…
ロランス少尉…!!


どうしてこんなところに!!
私の任務は女王陛下の護衛だ
ここにいても不思議ではあるまい
ふざけないで!!
あんたたちは…一体何が目的なの!?
あんな事件を起こして
みんなにいっぱい嫌な思いさせて…!!
そんなことしてまで手に入れたいものって…
一体なんなのよっ!!


「輝く環」！
リシャール大佐の真の目的は「輝く環」を手に入れることだったのです！
古代人が空の女神から授かった「七の至宝」のひとつで
全てを支配する力を持つと言われる伝説の古代遺物
「輝く環」…
…聞いたことがあるわ！
確かアルバ教授が…
リベール王国に古代の至宝が眠ってるって…!!


それってまさか…
女王様が言ってた王都の地下にある古代遺物のことなの!?
封印された女神の力など不用意に蘇らせてしまったら
世界に何が起こるかわかりません！
早く大佐を止めなければ…
スッ
余計なおしゃべりは慎んでいただこう
やめてっ!!
女王様から離れなさいっ!!
今はまだ任務を放棄する気はない
…と言ったらどうする？


決まってる!!
力ずくでも返してもらうわ!!
フ…
さすがはカシウス・ブライトの娘


え!?
いいだろう!
銀髪!?


ダン
ダンッ

エステルさん!!
エステルさん!!
しっかり…!!
陛下 これ以上は騒がれるな
…死ぬような ケガではない


あなた…
…その瞳…
なんて…深い色をしているのかしら…
…まだ若いのに
たいそう苦労してきたようですね
女王よ


あなたに俺を哀れむ資格などない
「ハーメル」の名を知っている
あなたには…
カニっ
女王様から…離れてって…
言ってるでしょ…！


女王様も
リベール王国も…
絶対…守るんだから…!
あんたに…
あたしたちの故郷(リベール)を…
めちゃくちゃにされてたまるもんですか…!!


フ…
…大佐を止めたければ宝物庫から城の地下へ急いだ方がよかろう
まさか…
「輝く環(オーリオール)」はこの城の地下にあるのですか!?
もはや手遅れだろうが…
少しは被害を食い止めることができるかもしれん
ダッ


では
さらばだ…
ぱた…
エステルさん!?
エステルさん!!
次回に続く


各地で暗躍する
謎の仮面の隊長ロランス少尉。
彼と戦う時、うちの大黒柱のジン
さんがパーティにいなかったので、
もー…ぼっこぼこにされてしまって、
以来、彼の強さがトラウマに
なっている。
強い…こわい…
彼、常にシリアスで色々重いのに、
ルーアンとか武術大会とかなんか
ちょっと楽しそうだったね。
啄木鳥しんきのFalcom日和

担当医師の許可を取ってから、ルバーチェ商会の者たちの話を聞き、知り合いを見舞って、受付へと戻ってきた。

「ありがとう、セシル姉。助かったよ」
「どういたしまして。ところで、もうすぐお昼だけど、ロイドたち、ご飯（ランチ）はどうするの？」
「とくに決めてなかったけど……」
「私、そろそろ休憩の時間だから、よかったら一緒にどうかしら？」
「そうだね」
「おっ、いいッスね！」
ランディが話に乗って、エリィとティオも異存はなさそうだ。
それでは、とウルスラ病院にあるオーベルジュ《レクチェ》へ向かおうとした。
そのとき――
「む、特務支援課か」
精悍な顔つきと、黒縁のメガネが印象的な、いかにも几帳面そうな男性が、ロイドたちのほうへと歩いてくる。
肩幅のある身体を背広（スーツ）に包んでおり、きちんとネクタイまで締めていた。
「あ、ダドリー捜査官！」
やってきたのは、クロスベル警察の捜査一課に所属するエリート捜査官、アレックス・ダドリーであった。
ティオが「……メガネスーツです」とつぶやき、ジロッと睨まれる。

「ふん。バニングス、またなにかあったのか？」
詰問するような口調だが、べつに疑っているとか怒っているとか、そういうことではなく、これが彼の地である。
ロイドは苦笑しながら頭をかいた。
「いえ、先日の事件の経緯を詳しく報告するために、関係者から話を聞いてるだけで……とくに変わったことは起きてません」
「そうか。ならばいいのだがな」
「はは……いくら俺たちでも、そうそう大きな事件に当たったりはしませんから」
「そう思うのなら、お前たちが、ここ数ヶ月で解決してきた事件の報告書を見直してみることだ」
「報告書ですか……？」
「いくつもの大きな事件を解決していることを……忘れたわけではあるまい」
ダドリーは仏頂面のままだったが、どうやら、支援課のことは評価してくれているらしい。
ティオが「……ツンデレです」とつぶやき、また睨まれた。
ロイドたちは苦笑する。
「えっと……ダドリー捜査官は、なにかあったんですか？」

「当然、仕事で来たのだ。詳しいことは捜査上の機密だから教えることはできないが……それより、お前たちはまだ病院に用事があるのか?」
「いえ、もう終わりましたけど……」
「そうか。であれば、早く次の支援要請に取りかかることだ……私は特務支援課の成果をあるていど評価している。成果をあげた者には実力があると判断する。そして、実力がある者は、さらなる成果をあげるべき——というのが私の考えだ」
「な、なるほど……!!」
　元々生真面目なところのあるロイドは納得してうなずいた。感銘を受けたと言ってもいい。
　しかし、マイペース派のランディは、ため息で応じる。
　ティオも「……回し車のなかを走るハムスターみたいです」とこぼして、またダドリーに睨まれてしまった。
　ダドリーが号令する。
「まだこの街(クロスベル)は多くの問題を抱えている。お前たちは実力を示した。であれば、相応の働きをするのが義務だ!」
「は、はい!!」
　追い立てられるように、ロイドたちはウルスラ病院を出る。

　セシルが手を振って見送ってくれた。
「お昼は、また今度ね。がんばって、ロイド。みなさんも」
「はは……ごめんね、セシル姉。また来るよ!」
「くぅ〜、セシルさんとのランチが……」
　ランディがこれ以上なく肩を落としていた。
　バス停に向かう途中——
　ティオが唇を尖らせる。
「……支援要請に応えるのは望むところですが……ツンデレメガネスーツは堅物すぎます」
「仕方ないわね。お昼はクロスベル市内で取りましょう」
　エリィがなだめる。
　ロイドも、ひさしぶりに会ったセシルとの昼食は残念だったけれど——ダドリー捜査官の職務に打ちこむ姿に、尊敬の念を抱いていた。
「俺たちも全力を尽くしてるつもりだけど、ダドリー捜査官は本当にすごいと思うよ。兄貴とは違った意味で目標だし、学ぶべきところも多い」
　エリィがうなずいた。
「そうね……ロイドのお兄さんも、とても仕事熱心だったんでしょう?」
「うん。仕事なのか遊びなのか、わからないようなときもあったけど」

「ふふ、型破りな人だったみたいね」
「今にして思うと、あれは情報収集だったのかな。ときどき兄貴はカジノやバーで盛りあがって朝帰りして、セシル姉に心配されてたよ」
「そういえば、ロイドのお兄さんと、セシルさんは……」
　エリィの表情が、わずかに陰る。
「ああ……」
　ロイドの兄ガイ・バニングスと、セシルは婚約していた。
　そして、彼女は今でも亡くなったガイのことを想いつづけているようだ。
　ロイドは青い空を見上げる。
「俺は、いつか兄貴に追いつけるのかな？」

　くいっ、とダドリーはメガネを直す。
　ロイドたち特務支援課を見送っていた看護師――セシルへと視線を向けた。
「騒がしくして申し訳ない。仕事柄か、どうも声が大きいようだ」
「ふふ、大丈夫でしたよ。いつもお忙しそうですね、ダドリーさん」

「これでも、だいぶ落ち着きました。病院のほうこそ患者が増えて大変でしょう」
「似たようなものです。数日前に比べたらよくなりました。ダドリーさん、今日はお仕事ですか？」
「警備隊の一部が退院できそうだと聞きまして」
「あら、耳が早いですね」
「それも仕事のひとつですから。面会することはできそうですか？」
「大丈夫だと思いますよ。一応、私も同席しますね」
「ご協力、感謝します」

　ウルスラ病院３１８号室――
「なるほど……隊員たちが集められ、上官から直接、手渡されたわけだな？」
「はい」
　金色の髪の女性が、はっきりと答えた。
　後遺症はあるらしいが、もう話しているだけなら、影響は感じられない。
　彼女はベッドに腰掛けて、ダドリーは向かい合う形でパイプ椅子に座っていた。
「そのとき、拒否した者は？」
「いませんでした。命令を疑っていては私たちの組織は成り立ちません」

「ふむ」
病室の扉が開かれる。ガラガラと台車を押して、ナースがひとり入ってきた。
「こんにちは〜。ミレイユさん、お昼ですよ〜」
もうそんな時間か――とダドリーは腕時計に目を落とした。
セシルが声をかける。
「おつかれさま、シロンさん」
「あ、セシルさん、おつかれさまです〜‼」
「ここは、私がやっておくわ」
「だいじょうぶですよ〜、まかせてください！　ミレイユさん、お食事で〜す！」
差し出されたトレーには、特別な治療なのかと思うくらい小さな器に、少ない食事が載っていた。
ミレイユが眉をしかめる。
「…………いただきます」
しかし、不服など言わずに受け取った。
ちょっと待って――とセシルが止（と）める。
「シロンさん、これシズクちゃんのぶんじゃない⁉」
「あれ？　ああ、間違えちゃいました〜‼」

「では、私のは……？」
「あはは、こっちです、こっちです。ごめんなさ〜い！」
「……シロンさん、本当に大丈夫？　いつまでも失敗ばかりしてられませんよ〜」
ダドリーは捜査手帳を開く。
（ふむ……明らかに子供用のメニューを出されても、文句ひとつ言わないか。彼女の証言は、あるていど信用してよさそうだな）
さらさら、とメモを書きこんだ。
パイプ椅子から立ちあがる。
「では、このへんで失礼するとしよう。ミレイユ准尉、調査書作成の協力、感謝する」
「もうよろしいのですか？」
「入院患者の食事を邪魔するつもりはないのでな」
「わかりました……なにか気になることがあれば、またいくらでも聞いてください。司令部からも、可能なかぎり捜査に協力するよう言われています」
「了解した。それでは」
ダドリーが敬礼し、ミレイユもベッドに腰掛けたままではあるが、敬礼を返した。

病室を出ると、一緒に退室したセシルが尋ねてくる。
「これで終わりですか？」
「ええ」
「そうですか。ダドリーさんは、お昼はどうされるんですか？」
「昼食か……とくに考えていないが……」
「ふふ、警察の方って、みなさんその調子ですね。ちゃんと三食を規則正しく取らないと、体を壊してしまいますよ」
「これは、面目ない」
思わぬところで注意されてしまった。
たしかに、忙しいと食事を抜くことも多くなる。いざというときのためにも、できるときは規則正しい食生活を心がけるべきだろう。
セシルが優しげな笑みを浮かべる。
「ふふ……ロイドもすぐ食事を抜くんですよ。無理しないように言ってるのに……ガイさんも同じでした。一生懸命なのはわかるのですけれど」
「そうですか。あいつらも……」
「でも、なにをするにも健康でないと。そのために、食事は大切だと思うんです」
「心に留めておきます」
「ダドリーさん、よかったら《レクチェ》で、ご一緒しませんか？」
「え……？」
「私も、今から休憩に入りますから」
「あ、いや、私ですか……？」
「もしかして、急ぎの用事がありましたか？」
「いえ、今日は本当は非番なので」
民間企業風にいえば、休日出勤とかサービス出社とか、そういう形だった。
だからこそ、市街を離れて病院まで来ることができたという面もある。
ダドリーは思案した。
（ひとりでサンドイッチでも食べたほうが早く食事を終えられるが……このセシル・ノイエス嬢は、ウルスラ病院の看護師チーフで、今回の被害者たちと長く接している。思わぬ情報が得られるかもしれんな）
「ふふ、もしかして、またお仕事のことを考えてますか？」
「あ、その……」
「仕方ありませんよね、警察官なんですから」
「……そうですね。でも、お食事はご一緒させてもらえますか」
「はい」

ウルスラ病院オーベルジュ《レクチェ》——

ダドリーは、セシルと同じ〝特製ビーフシチュー〟を食べた。彼女がお勧めするだけあって、野菜が豊富で、味もなかなかのものだった。

食後のコーヒーも文句なしだ。

セシルが微笑みかける。

「どうでしたか?」

「美味しかったです。それに、いろいろと知らなかった話も聞けましたし」

「お役に立ちますか?」

「捜査に直接関係があるかはわかりません……しかし、こういったことの積み重ねが大切だと思います」

症状の経過や、患者たちの精神状態や、効果のあったケアなど、有意義な情報だといえる。

「ふふ……よかったです」

笑顔の温かい女性だな、とダドリーは思った。

そのとき、隣の席で甲高い声があがる。

「きゃ～、このケーキ美味しいわ～‼　リンも食べればいいのに♪」

「いいっての。私が甘いの苦手なの、エオリアだって知ってるだろ?」

「こんなに美味しいのに～。この味が楽しめないなんて、リンってば可哀想～」

「また太るよ……?」

「ひどい!　お姉さん、泣いちゃうわ!」

騒がしい。

ダドリーは眉をひそめた。

(リンにエオリア……クロスベルの遊撃士たちか……)

警察こそが市民を守る組織だというプライドを持っているので、『民間人の保護』を掲げる民間団体——遊撃士協会(ブレイサーギルド)には強い対抗心を抱いているのだ。

とはいえ、病院で揉めるつもりはないが。

彼女たちの会話が聞こえたのか、セシルがメニューを見せてくる。

「ここのお店、ケーキも美味しいんです。カロリー控えめでも味を落とさないのがポリシーだとか」

「いや、私は甘いものは……」

「苦手ですか?」

「そ、そうですね。甘くないケーキならいいのですが……」

「くすっ……あ、ごめんなさい。ちょっと思い出したことがあったもので」
「思い出したこと？　なんですか？」
「昔のことです。聞いても、お役には立たないと思いますけど……」
「どんなことですか？」
「本当に、たわいない話ですよ――私、初めて大きなケーキを作ったとき、レシピを間違えてしまって……まったく甘くないケーキになっちゃったんです。むしろ、しょっぱいくらいの！　それなのに、味見したガイさんは、美味しいって言ってくれて」
「……あいつらしいな」
「ふふ、てっきり、優しさからお世辞を言ってくれたんだと思ったんです。ところが、本気で美味しいと思ったみたいで」
「え？」
「なんと、上司のお誕生日に持って行っちゃったんですよ」
「そ、それは……あいつらしいな！」
「うふふ……びっくりしちゃいました」
「大丈夫だったんですか？」
「そのときの上司は、セルゲイさんでしたから。結局、アリオスさんと三人で、ぜんぜん甘くないケーキを食べたみたいですよ」

「なるほど……」
　セシルが作ったのだと嬉しそうにしているガイを前に、微妙な味のケーキを黙々と食べるセルゲイとアリオスの姿が目に浮かぶ。

「どーだい、この甘くないケーキは！　イケてるだろ!?」
「お、おう……まぁ、斬新ではあるな……」
「……………うむ」

　思わず笑いがこみあげた。
　あまり表情を出さないダドリーだが、唇の端が引きつってしまう。
　セシルはころころ笑っていた。
「そういえば、ちょうど、この時期だったかしら……？」
「ん？　セルゲイさんの誕生日ですか？」
　ダドリーは手帳を開いた。
　わざわざ日付に丸を付けるようなことはしていないが、警察関係者のプロフィールは控えてある。

「本当だ。今日だったのか……」
「あら、それじゃあ、お祝いしたいですね」
「うーむ……」
特務支援課も忙しいだろう、とは思うが――
（忘れて過ぎていたならともかく……気付いたのに、なにもしないのは落ち着かないな）
セシルが珍しく身を乗り出す。
「ロイドたち、パーティとかするのかしら？」
「まさか。仮にも警察署で……いや、支援課（あいつら）のことだからな」
「ふふ……ロイドもお世話になってるし、急患が入らなければ、夕方にお祝いを持って行くくらいしようかしら」
「……そうですね」
「なにかするのか、ロイドに聞けるといいのだけれど……あ、そろそろ、休憩の時間が終わりみたいです」
「それでは、私も失礼します」
ダドリーは病棟に戻っていくセシルを見送る。
ふと、隣の席を見ると、難しい顔して書類と睨めっこしているリンの横で、エオリアが三つ目のケーキに手をつけていた。
「うふふ～♪　低カロリーだから、だいじょうぶ～♪」
（それは無理だ！）

クロスベルに戻ったダドリーは、百貨店《タイムズ》に立ち寄った。
中央広場にあり、ふたつの針がぐるぐる回る看板が目印の総合小売店で、高級品から日用雑貨まで幅広く取り扱っている。
入口から階段へ向かう棚に、みっしぃグッズが売っていた。『プレゼントにも最適！』とポップにはあるものの。
（うーむ……さすがに、これをセルゲイさんにプレゼントするのは、ありえないな）
二階にあがり、いつも利用している靴屋に顔を出した。
この店では、年に何度か革靴を仕立てている。
仕事柄、すぐに靴がダメになってしまうからだ。同僚にはスニーカーを履く者もいるが――捜査官ならスーツと革靴だろう、とダドリーは信じている。
店主のハンソンが、にこやかな笑みで迎えた。
「おおっ、いらっしゃいませ、ダドリー様。また新しい革素材が入荷しました。ぜひ見ていっ

てください」
「ほう……」
「どうですか、この革の艶は？　帝国方面から入ってきたばかりの品でして。なかなか珍しいですよ」
「むむ、たしかに……この革でオーダーメイドの革靴を作ったら……あ、いや、今日は知り合いへの贈り物を探しているところでな」
「贈り物ですか？　サイズは、おいくつでしょうか？」
「それは……」
手帳を開いてみたが、セルゲイのプロフィールに足のサイズまでは書かれていなかった。ため息をつく。
（さすがに、そこまでは調べてなかったか……足に合わせて仕立てた革靴を履いたときの、あの雲のうえを歩くような心地よさを、セルゲイさんにも味わってもらいたかったが！）
残念ではあったが、当てずっぽうに用意できるものではない。
「すまん。邪魔したな……また寄らせてもらう」
「お待ちしております」
ダドリーはアクセサリーなどを扱っているコーナーを見てみることにした。
「うーむ……」

並んでいる商品に視線を巡らせる。
ネクタイやタイピンは『肌身離さず』という意味合いから、恋人が贈る物らしい。衣服なども同じだ。
ハンカチは『別れ』の意味があるのだとか。
時計は『勤勉をうながす』という意味があるらしく、目上に対しては失礼になる。
「ええい！　意味がない贈り物はないのか⁉」
「お客様、いかがなさいましたか？」
店主のベイカーが声をかけてきた。孫もいるという初老の男だ。
「いや……職場の上司が誕生日なのでな」
「なるほど、ダドリー様のご職業でしたら、署名される機会も多いでしょう。万年筆などはいかがですか？」
「万年筆か……なるほど、さすがだな」
「畏れ入ります。種類はいろいろありますが……これなど、熱烈な愛好家がおり、あのクロスベル国際銀行の総裁ディーター・クロイス様もお使いだとか」
「ほほう」
「お値段は、それなりですが」
「ふむ……なに、これくらいの手持ちはある。包んでくれ」

「有り難うございます」
初老の男が、うやうやしく頭を垂れた。

プレゼントを持って、ダドリーは特務支援課のビルへと向かった。
ロイドたちは飛び回っているが、課長であるセルゲイは、支援課ビルにいることが多い。
玄関扉を開ける。
ソファーの置かれた応接スペースには、巨大な白狼が寝そべっていた。
「グルル……ゥ……」
ツァイトが片目を開いてダドリーのことを睨み、また目を閉じる。
（……入ってもいい、ということか？　番犬というには強烈すぎますよ、セルゲイさん）
「失礼する」
ダドリーが特務支援課のビルに入ると、厨房になっている部屋から赤毛の青年——ランディが「ん？　お客さんか？」と顔を出した。
「げっ⁉」
という声をあげて、げっ⁉　という顔をして、すぐに引っこむ。

「うおっ、お、おい！　ロイド！　やばいぞ……」
「……えっ⁉　ダドリー捜査官だって⁉」
そんな会話が聞こえてきた。さらに、女性陣の声も。
「げっ……という感じですね……」
「うーん、ちゃんと話せばわかってくれるんじゃないかしら？　悪いことをしてるわけではないのだし」
「ねーねーロイド、どうしたの？」
ティオとエリィと、幼い女の子の声まで聞こえてきた。
ダドリーは眉をひそめる。
（やれやれ、なにをしているんだ、支援課の連中は？　セルゲイさんにプレゼントを渡して早く帰るか……）
課長室へと足を向けた。
そのとき——
エニグマの着信音があがる。
ダドリーは反射的に胸元に手をやったが、この音は自分のものではない。
厨房からロイドの声が聞こえてきた。
「はい！　えっ⁉　ああ……そうか。わかった……いや、それが支援要請なら、俺たちは

受けさせてもらうよ！　場所を教えてくれ。詳しいことは依頼者から聞く」
　通話を終えたロイドと、支援課の面々が厨房から出てきた。
「おつかれさまです、ダドリー捜査官！　すみませんが、今から――」
「事件か、バニングス⁉」
「はい！　〝いなくなった飼い犬を探して欲しい〟という支援要請です！」
「ッ⁉　い、犬か……」
「犬です。行ってきます！」
　ロイドが走って玄関へと向かう。
「あ、ああ……」
　さすがに休日を犬探しに捧げる気にはなれないダドリーだった。
　ティオとエリィが、ロイドに続く。
「……どんな犬でしょうか？　わたし的には、まふまふできる長毛の大型犬が好みですが」
「ん～、私は部屋の中で飼える小型犬が好みかしら？」
　最後に「しゃあねえな～」と文句を言いつつランディが出ていく。
「気をつけてね～」
　厨房から顔を出して、ライムグリーンの髪の幼い女の子が小さな手を大きく振っていた。

　ロイドたち四人が出動し、支援課ビルにはダドリーと、その幼い女の子――キーアだけが残された。
　ずっと寝ているツァイトもいるが。
　キーアの大きな瞳に、じっと見つめられる。
「えへへ、こんにちは！」
「うむ……留守番か。大変だな」
「キーアはへいきだよ」
「いつも、こうなのか？」
「ん～、だいたいこんなかんじ。ロイドたち忙しいから」
「そうだな……」
　やはり子どもを育てる環境としては不適切ではないか――と感じるダドリーだが、それでも、当のキーア本人がロイドたちの元に留まることを望んでいるらしい。
（……そういえば、バニングス兄弟も似たような境遇だったか。どんな場所が幸せかは人それぞれかもしれないな）

キーアのことを見つめていると、『?』を浮かべて首をかしげられた。
「どうしたの？　ダドリー、今日もぶすっとしてるね」
「ぐっ……別にぶすっとしているわけではない！　相変わらず年長者に対する礼儀がなっていないようだな」
「えへへ、なにかご用だった？」
ダドリーの抗議は、さらりと流された。
ぐぬぬっと歯がみするが、子どもの言うことだ。こらえておく。
「今日は、セルゲイさんに渡すものがあってな」
「かちょー？　おでかけしてるみたい。帰ってくるのは夕方かな」
「ふむ、本部だったか」
「うん」
子どもの世話は大変なばかりだろうと考えていたが、まるで受付のようだった。実は意外と役に立っているのかもしれない。
「セルゲイさんは、ご不在か。仕方がない……渡す物は机にでも置いておくことにしよう」
「うん、わかった！　かちょーに言っておくね！　じゃあ、キーアはお料理があるから」
「ん？　待て。お前がひとりで料理をするというのか？」
「うん！　かちょーが帰ってくる前に作らないとね！」

にこにこと笑顔でキーアが厨房に入る。
中を覗きこむと、いくつもの食材が作りかけで置いてあった。
そういえば、ロイドたちは料理中に支援要請を受けて出動したのだったか。
「んと、油物は後にしないと冷めちゃうから……先にスープかな」
キーアが包丁を手にする。
幼い彼女に、厨房の調理台は高すぎるようで、背筋を伸ばして身を乗り出すような格好で野菜を切りはじめた。
ダドリーはあわてて止めに入る。
「ま、待て……子どもが刃物を使うなど危ない」
「ほえ？　へいきだよ」
「すこしは言うことを聞かんか！」
「……でも、今のうちにやらないと、パーティーに間に合わないし」
「パーティーだと？」
「うん！　かちょーのお誕生日パーティーだよ」
「あいつら、勤務時間に……!!」
「料理したらダメだったの？」
「あ、いや……待機中に料理を禁止するという規則はないが、常識的に考えてだな……」

せいぜい、買ってきたケーキを食べるていどにするのが、普通ではないか？　まったく特務支援課は型破りだ。

キーアが大きな棚の上段へと手を伸ばす。指先をぷるぷるさせるが、届かないようだ。

「う〜〜〜……」

「どうした？」

「お塩が切れちゃってるの。前に買っておいたのが、棚の上にあるんだけど……」

「これか？」

当然ながら、ダドリーにとっては、なんでもない高さだった。紙袋を取ってやる。

「うん、これ！　ありがとー、ダドリー‼」

「まったく……子どものしつけ方について支援課（あいつら）にひと言、言っておかねばな……」

「じゃあ、料理しちゃうね」

キーアが小さい体にもかかわらず、テキパキと準備を進めていく。

「バニングスたちが帰ってきてからにしたらどうだ？」

「だって、いつ帰ってくるかわからないし……」

たしかに、いなくなった犬を探すなんて、いつになるか。

ダドリーはこめかみを押さえて、ため息をついた。

「仕方ない……私も手伝おう」

「え？　ほんと⁉」

「子どもが、ひとりで料理をするなど、危なっかしくて見ておれんのでな」

スーツを脱いで、シャツの袖をまくる。ロイドのエプロンを借りることにして前にかけた。

きらきらとキーアが瞳を輝かせる。

「ダドリー、やっさしぃーー‼」

たいへん不本意ながら、ダドリーは料理を手伝うことにした。

手を洗って準備を終える。

「はじめは、なにを作ればいい？」

「なにが得意なの？」

「と、得意な料理か……」

正直なところ、それほど慣れてはいないのだが、子どもの手前、そんなことは言えない。

「……どんなものでも任せるがいい」

背筋を冷や汗がつたった。

ん〜、と考えてから、キーアがレシピを指さした。
「じゃあ、この《フレッシュサンド》を作ってもらえる？」
「うむ、これなら♪　あ、いや……なんでもない。まかせておくがいい」
思わず明るい声が出てしまった。とりつくろうように、ことさら重々しく答え、ぐいっと胸を張る。
キーアが笑顔を浮かべた。
「ありがと〜‼」
期待に応えるべく調理をする。
ゆで卵を作るために、まずお湯を沸かす。その間に、きゅうりを刻んだ。
温めた卵をナイフで細かくし、きゅうり、マヨネーズ、塩、こしょうと混ぜ合わせる。
焼きあげたトーストに乗せ、ハムとレタスもはさみこむ。
完成だ。
「よし、上出来♪　あっ……う、うぉほん！　ふん、これでいいのか？」
また弾んだ声をあげてしまった。
すこしだけ頬が熱くなる。
くいっ、とメガネを直した。
キーアが手をたたく。

「わぁ〜、美味しそう♪」
「ふ、ふふ……まあ、当然だな」
子ども相手ではあるが、褒められて悪い気はしないダドリーだった。
「お前のほうは、どうだ？」
「んと、キーアはね、《薬膳麻婆豆腐》ができたとこ」
「なっ⁉」
いつの間にか、キーアの手によって完成度の高い麻婆豆腐ができあがっていた。
濃い赤色と香辛料の匂いが食欲をそそる。
子どもの腕前とは思えない。
むしろ、素人のレベルではなかった。
「こ、これは……なんということだ……」
「えへへ、じゃあ、次はね――」
「どんなものでも任せてもらおう！」
「ほんと⁉　じゃあ、《匠風オムライス》を作ってね！」
「ただのオムライスではなく、匠風に仕上げろという事なのか…！？」
「あ、無理そう？」
「むむ……い、いや、もちろん大丈夫だ！」

「えへへ」
　ダドリーはレシピを見ながら頑張ってみたが、とき卵を薄く広げたり、崩さずに巻くのは本を読んだだけでは難しかった。
　ぐしゃぐしゃになる。
「うっ、いかん……メガネが曇って……」
「え……ダドリー、だいじょうぶ？」
「これは……その……」
　オムライスを目指した別の料理ができあがってしまった。
　失敗料理というやつだ。
「ん～と、どうしよう？　食べてみたら、意外と美味しいかも？」
「パーティに出す料理ではないな……仕方ない。これは、私が食べるとしよう」
「え、でも……」
「いいか、たとえ失敗しても、食べ物を粗末にするのはダメだ」
「わかった。じゃあ、ツァイトにあげようよ！」
「む……食べるだろうか？」
　ダドリーは充分に冷ましてから、ずっと寝ている白狼のところへ失敗オムライスを持っていった。



　皿を持って現れたダドリーとキーアに、ツァイトが身体を起こす。
「グルル……」
「ツァイト〜、ごはんだよ！」
「ガウッ」
「えへへ、〝美味しそうな匂いがする〟だってさ」
「まるで言葉がわかるみたいに言うのだな」
「わかるよ〜」
「ふっ……そうか」
　ダドリーはうなずいた。
　子どもは夢があるものだな――と微笑ましい気持ちになる。
　身を起こしたツァイトの前に皿を置いた。
　ガフガフと食べはじめる。
「ツァイト、おいしい？」
　キーアがにこにこしながら聞くと、白狼がひと声、鳴いた。
「ウォンッ！」
「へー、そうなんだ〜。〝なかなか美味しい。この料理を作った者は才能がある〟だってさ！」
「あ、ああ……」

　犬の食事を作る才能を褒められても、あまりうれしくなかった。
　そもそも、失敗した料理だし。
　ダドリーは、そっとため息をついた。
「よし、次こそ！」

　そして、数分後――
　キーアが気まずそうな顔をする。
「えっと……じゃあ、その《フライドフィッシュ》になれなかった料理は、コッペに」
「う、うむ……」
　屋上へ行き、黒猫に失敗した魚料理を与えた。
「にやゃゃあ〜‼」
「これは……喜んでいるのか？」
「にゃ〜お」
　食べ終えたコッペが、支援課ビルの裏へと消えた。
　空になった皿と食べかすを片付けていると、すぐに猫が戻ってくる。
「にやぁ〜〜〜お」
　ころり、とダドリーの前に、黒色の石を落とした。

「なんだ？」
ゴロゴロゴロゴロ……とコッペが喉を鳴らす。
石を手に取った。
「もしかして、私に？　こ、これは《時》系統のクオーツか⁉　しかし、形は同じだが、なにか違うような……」
ふと思い出す――配備予定の試作品として見せられた新型エニグマのことを。
戦闘時の行動力を支援するクオーツに、似たようなものがあったはず。
「まさか、新型のクオーツなのか⁉」
「にゃおーん」
「この猫……何者だ⁉」
「にゃぁおお～ん」
コッペは満足そうに鳴き声をあげると、よく日の当たる屋上で、ころりと丸くなった。
ぬぬぬ、とダドリーはうなる。
（売られてもいないクオーツを入手してくるとは……もしや支援課の活躍の陰には、この猫の働きが⁉）
「……ふっ……まさかな。偶然だ。このクオーツは遺失物として届けておくとして……一応、猫のことは一課の書類に追記しておくか」

後日、引き取り手の現れなかった《行動力1》のクオーツは、ダドリーの手に戻り、配備されたばかりのエニグマⅡに装着されるのだった。

月刊FALCOM MAGAZINE Vol.180

発行人	田中一寿
発行協力	日本ファルコム株式会社
編集	小渕智幸 河野崇
デザイン・DTP	株式会社 ACQUA
表紙ロゴデザイン	荻窪裕司（デザインクロッパー）
発行	株式会社フィールドワイ 〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台3-1-9　日光ビル3F TEL 03-5282-2211（代表） http://www.field-y.co.jp/

FALCOM MAGAZINE SPECIAL プレゼント!!

アンケートにお答えいただいた方から抽選で
ここでしか手に入らないアイテムをプレゼント！



3名様

『も～っと集まれ！ファルコム学園』缶バッジ

大人気!! オリジナル缶バッジを5個セットで3名にプレゼント！　※絵柄はランダムです。

ご応募は特設サイトまで▶ http://www.field-y.co.jp/root/falmagap/

メールでご応募の場合は下記フォーマットに記入のうえ、（falmaga@field-y.co.jp）まで
お送りください。当選者には編集部よりメールにてお知らせ致します。

件名：vol.180プレゼント係
1：お名前（ペンネーム可）
2：面白かった記事の番号→
　つまらなかった記事の番号→（記事一覧から1つずつ）
3：アンケート①2026年のファルコムに期待していることは？
　アンケート②『空の軌跡 the 2nd』で注目しているポイントは？
4：希望するプレゼント番号
5：ご意見・ご感想など

記事一覧

1:も～っと集まれ！ ファルコム学園
2:ファルコムニュース
3:『空の軌跡 the 1st オリジナルサウンドトラック』レビュー
4:英雄伝説 空の軌跡
5:啄木鳥しんきのファルコム日和
6:英雄伝説 零の軌跡 午後の紅茶にお砂糖を

応募締め切り　2月24日（火）

メールにてお送りいただくお名前やご住所等の情報は、商品の発送のためにのみ利用し、そのほかの目的には利用致しません。
また、情報は応募締め切り後3ヶ月を越えて保有することはありません。